
嘘から始まる世界[東京鬼祓師]

須田 継

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘から始まる世界「東京鬼祓師」

【Nコード】

N0503P

【作者名】

須田 継

【あらすじ】

「オレは、あやひと 絢人の事は好きだよ」

いきなり告白の言葉から始まる全然BL要素の無い話。

可哀想な君のための、世界との架け橋にオレはなろう。

第九話の香ノ巢しののめ絢人のクリスマスイベントについてネタばれしていきますので、プレイ中の方はご注意ください。

(前書き)

東京鬼祓師とうきょうおにうばしのファンフィクションです。

第九話、香ノ巢かうのす人あやひとのクリスマススイベントネタばれ。プレイ途中やプレイ予定の方はご注意ください。

また、七代千しちだいかずきが二週目設定になっています。

東京鬼祓師とは……

世界には《カミフダ》と呼ばれる不思議な力を持ったカードが散らばっている。そのカードの《情報チカラ》を認識・識別できる特殊な眼

《秘法眼》を持つ主人公は、《カミフダ》を管理する封札師として《新宿》の鴉乃杜学園へ転校する。

そして《カミフダ》の一つである《呪言花札じゅごんはなふた》に、札を扱う執行者として選ばれた主人公は、戦いに巻き込まれていく。

九龍妖魔学園くわんりゅうまがくえん紀と同じ舞台上で繰り広げられる別のお話。ツッコミ所満載の学園伝奇です。

「オレは、あやひと 絢人の事は好きだよ」

言われた赤い服の青年 このすめあやひと 香ノ巢絢人は一瞬目をみはった。そしてふつと優しく笑う。

「千かずき 燿くん。慣れない嘘はつくものじゃない。バレバレなんだけど」

先ほどの声の主 しちだいかずき 七代千燿の手元にある蜂蜜を奪い取り、絢人は自分の紅茶にそれを入れてしまった。本来、この店の目玉メニューであるフレンチトーストに付ける為のそれで、ハニーミルクティーを作って、絢人は満足げに笑う。

一方、取られてしまった千燿はといえば、相変わらずじつと絢人を眺めていた。そして、薄味のフレンチトーストにフォークをさす。

「あからさまな嘘を言えば、それを本当の事にしたくならない？」

「幸徳寺のお嬢さんしんとくでうらが使うような言霊ことたまかな？ そういった物は、レディレディに使うべきだと思っけどね」

「何言ってる。オレは絢人のマネをしたただだよ」

それに、絢人少し首を傾げた。

「マネかい？」

「忘れたの？ 『花園神社で御霧みぎりを見た』 絢人はあの時ときそう言っただよ」

ニイと歯を見せて千魃が笑む。それに、絢人は冷汗が背中を伝うのを感じるが、そんな事は表情に一欠けらも出さない。

「そんな事もあつたねえ」

「あの時、御霧はいなかった。代わりにいたのは、絢人と輪りん」

大きく口をあけて、フレンチトーストを千魃は食べる。あまり上品とは言えない食べ方なのだが、代わりにとても美味しそうに見える食べ方だ。

そんな千魃に苦笑しつつ、絢人は言葉を返す。

「あの時はたまたま彼が来なかったただけだろうか？」

「違うね。誤った情報を流すことで、絢人は御霧を釣り上げた」

断言され、絢人は大きく笑った。

「もしかして、彼がバラしちゃったのかな？」

「いや、オレの推測」

千魃はそう言いながらも隠す 別の御霧に聞いたのだ、と言う事実を。

しかし、絢人は早いうちから降参をしたように両手を挙げた。

「仕方ないだろう？ 輪に付きあつたための出まかせだったからね。あの後本当に彼が釣れたのはおまけみたいなものだよ」

「そうか」

頷き、残りのフレンチトーストを食べきつてから、千旭は水を飲む。そして一つ息をついてから、絢人を見ずに千旭は口を開いた。

「今もまだ、殴られなきゃ怖いかな？」

それがイブの時の話なのだと思い、絢人は苦笑する。

加害と被害と言う歪んだ関係でしか、自分と他者を繋ぐ事が出来ない。そう告白した夕暮れの事。

「そういう部分が無いとは言えないけどね。こうやって蜂蜜を分けてくれる人間と一緒にいるのは……そう、心地良いね」

そう告げて、絢人は軽く片目を瞑った。

「それなら、良い」

言つて、千旭は立ち上がって軽く手を挙げた。

「しづかわ 渋川さん。会計」

「少し待ってる」

眼帯をした強面こわむせてのマスター 渋川は別の客にコーヒーを入れて

いた。そんな彼を手伝うように、ダックスフンドのカナエさんが千旭を先導する。

料金の精算を終えた千旭は、絢人に背を向けたまま軽く手を振って出て行った。それを見送った上で、渋川が絢人に笑う。

「何だい？ マスター」

訝しげに絢人が問うと、渋川は子どもにするように絢人の頭を撫でた。それに、思わず絢人は硬直してしまう。

「友がいれば、少しは楽しいだろう？」

精彩を欠いた世界に住んでいた自分に対して言った、渋川の最初の助言。それに気付き、絢人は言葉にせず頷いた。

世界は絢人にとって思いがけず楽しい物になっていた。

(後書き)

個人的に大好きな絢人話でした。

一週目では絢人のクリスマススイベントを逃したのですが、二週目で絢人の真実を知り、泣きそうになりました。お前、あの時そんなに思いつめていたのか。

前半では大抵の人がどん引きする彼の様々な行為が、悲しすぎるほど歪んでしまった結果なのだ……知ってしまったからには、どうしても救済したくなりました。

まあ、三週目をして平手で感情値が上がる音を聞くと、それも吹き飛びそうなのですが(笑)

ちなみに、一週目はなりふり構わず絢人を

弥紀みのりに殴ってもらう

巴ともえに殴ってもらう

自分で殴る (ピッ)

放っておく

殴る

蹴る

平手打ち (ピッ)

無視する

と違って選択してしまったのは私だけではないはずだ！(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0503p/>

嘘から始まる世界[東京鬼祓師]

2011年1月31日05時18分発行